

学会参加報告

第62回日本小児保健協会学術集会に参加して

宜野座村役場 健康福祉課
保健師 野 辺 あやの

今回、「多様な子どもたちの健やかな成長と発達」をテーマに長崎県で開催された、日本小児保健協会学術集会に初めて参加させていただきました。

「母から子へのたいせつな贈りものと不都合なお荷物～母子感染の話」では、赤ちゃんは母親から生まれるときに、様々な微生物を受け継ぎ、栄養摂取や病気の予防をしており、その腸内細菌叢が脳の発達や肥満等と関連していること、微生物の受け渡しのタイミングが合わないと病気を引き起こす事もあるとの講演がありました。

特別講演「ゴリラの子育てから見た人間の子どもの不思議」では、ゴリラに比べ人間の子は成長が遅いが、これは、人間の脳は5歳くらいまでに大人の90%の発達をするために、エネルギーの85%を脳の成長にまわし、脳の成長が止まる頃に身体の成長が加速する（思春期スパート）ためであることを学びました。「家族愛の脳内メカニズム：母性、父性、祖母愛、思春期を介した子どもの親への愛」では、テストステロンの分泌の仕方、脳の報酬系の反応する部分が変わり、男児が子どもから思春期を迎え、成人となっていく過程がわかりました。

これらの話を拝聴して、乳幼児期の体や心の発達のメカニズムは本当に素晴らしいと思いました。私たち保健師は、妊娠前や妊娠中、そして出産後の子育て時期の親子それぞれに起きている目に見えない体のメカニズムを、目に見える形で伝えることが大切です。それを理解していないと、保健指導しても伝わらないと感じます。体のメカニズムを説明

し、情報を提供し、対象者がどの時期に何をすればよいか自分で選択できるよう、保健指導の力量をつけていかないといけないと思います。現在、沖縄県で問題となっているメタボリックシンドロームの予防は、大人になってからでは遅く、子どもの頃からの生活習慣が大事です。生まれる前から高齢者まで、生涯を通じた生活習慣病予防を目標に、しっかり保健活動をしていきたいと思っています。

一般演題の、沖縄小児保健研究「妊娠中の喫煙と3歳児の成長」では、妊娠中の喫煙は男児に影響が強いこと、「後期早産時の乳児期初期における体重増加に関する検討」では、後期早産時は乳児前期の体重増加量が多くなる事が示唆されました。多くのデータを蓄積し、解析していくことで、いろいろなことが見えてきます。沖縄県小児保健協会が蓄積してきた大量のデータを活用し、住民へ伝えていくとともに、今後、母子保健活動において、どのようなデータが必要になるか、評価の視点も考えながら活動していきたいと感じました。

学術集会以外でも、参加された先生方や市町村保健師、沖縄県小児保健協会事務局の方々と情報交換できたことは有意義でした。皆さんの母子保健への熱い想いに触れ、今後さらに連携しながら保健活動をしっかりやっていこうと改めて思いました。

最後に、このような貴重な研修の機会をあたえていただいた沖縄県小児保健協会の皆様、業務が重なる中、快く研修へ送り出していただいた宜野座村役場の皆様に感謝申し上げます。

学会参加報告

第62回日本小児保健学会学術集会を振り返って

宜野湾市役所 健康増進課
保健師 田 場 典 寿

平成27年6月18日(木)から20日(土)の3日間、長崎県で行われた日本小児保健学会学術集会に参加させていただきました。“多様なこどもたちの健やかな成長と発達”をテーマに、医療、福祉、教育など様々な分野の講演や発表を拝聴することができました。

初日に開催された“保健師のための乳幼児健康診査技能講習会”では、普段実施している乳幼児健診について、専門職として確認すべき視点や時期、受診する保護者からの思い、健診後のフォロー等について改めて考え直す機会となりました。多様化する社会の中で、乳幼児健診が求められる役割が変化し、子どもだけでなく養育者に目を向けた子育て支援としての役割も求められてきています。発達が気になる子について、保護者への伝え方やその後のフォローの有無次第では、“可愛いわが子”“楽しい子育て”と感じていた保護者の思いを一変させてしまい虐待のリスクを増加させてしまうという指摘があり、普段の業務を振り返ってはっとさせられました。保護者の精神状態や生活状況、健診後のフォローの有無などについてしっかりアセスメントした上で、適切な介入方法について助言する必要があると感じました。“これからどうするか”の説明についても、1度に理解できるのは多くて3つ程度のため、一気に説明をせず“受け止めてもらう”“理解してもらう”ことを目標に少しずつ話すことが大切だと学びました。

また、健診はあくまでスクリーニングのため100%完璧に把握する事は困難ですが、受診者の認識とは温度差があり『健診を受けて大丈夫と言われたから問題ない。』と捉えてしまうことがあるため伝え方には注意が必要、“様子を見ましょう”という言葉が犯罪になりうることもある、という話が印

象的でした。実施者からすると“one for them”でも、受診者からすると“only one”であることを認識し、個々の受診者に寄り添った視点で接することが重要だと感じました。受診する保護者が安心して子育てに取り組むことができるような乳幼児健診を実施したいと改めて感じました。

3日目に開催された“病児を支えるネットワーク”についてのシンポジウムでは、先天性トキソプラズマ&サイトメガロウイルス感染症患者会“トーチの会”の活動紹介や、先天性感染症についての記事を取り扱うマスメディアの役割等についてのお話があり、誤った認識で保育園預かりの際に他児と隔離されてしまった保護者の事例紹介や、正しい知識を普及・啓発することで先天性感染症に罹患する児をなくしたい保護者や報道関係者の思いを伺うことができました。普段接する妊婦さんや妊娠する前の市民へもしっかり周知・啓発していきたいと強く感じました。

学会終了後の懇親会では沖縄県の小児保健に携わる小児科医の先生方や他市町村の保健師さん、小児保健協会の皆様と交流し楽しい時間を過ごすことができ、今後保健師として働いていく上での励みとなりました。

このような貴重な機会を提供していただいた小児保健協会の皆様に深く感謝申し上げます。



長崎市内を走る路面電車